
第 8 日目のまとめ ベクトル空間

山本健一

<http://mag.eee.u-ryukyu.ac.jp/linalg/>

ベクトル

● $a + (b + c) = (a + b) + c$

● $a + b = b + a$

● $a + 0 = 0 + a = a$

● $a + (-a) = 0$

● $s(a + b) = sa + sb$

● $(s + t)a = sa + ta$

● $(st)a = s(ta)$

● $1 \cdot a = a$

以上の公理を満足するもの

ベクトル空間

ベクトル空間

ベクトルの集合で、零ベクトル (0), 和 ($a + b$), スカラ倍 (sa) が定義され、ベクトルの公理を満足するもの。

● 一次結合

$$s_1 a_1 + s_2 a_2 + \cdots + s_n a_n$$

をベクトル a_1, a_2, \dots, a_n の一次結合という。

● 「一次従属」

ベクトル空間 V のベクトル $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ について少なくともどれか1つのベクトルが残りのベクトルの一次結合となっている。

● 「一次独立」

ベクトル空間 V のベクトル $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ についてどのベクトルも残りのベクトルの 一次結合となっていない。

部分空間

n 次元ベクトル空間 (V^n) の部分集合 $W (W \subseteq V^n)$ が, 次の条件を同時に満たす時, W を V の**部分 (ベクトル) 空間**という。

● $a \in W, b \in W \Rightarrow a + b \in W$

● $a \in W \Rightarrow sa \in W$ (s :スカラ)

(例) 数ベクトル空間 R^n において, 一次同次方程式 $Ax = 0$ の解の全体 $W = \{x \in R^n | Ax = 0\}$ は, R^n の部分空間であり, $Ax = 0$ の**解空間**という。

有限個のベクトル a_1, a_2, \dots, a_n が与えられたとき, それらの一次結合全体は一つの**部分空間**をつくる。



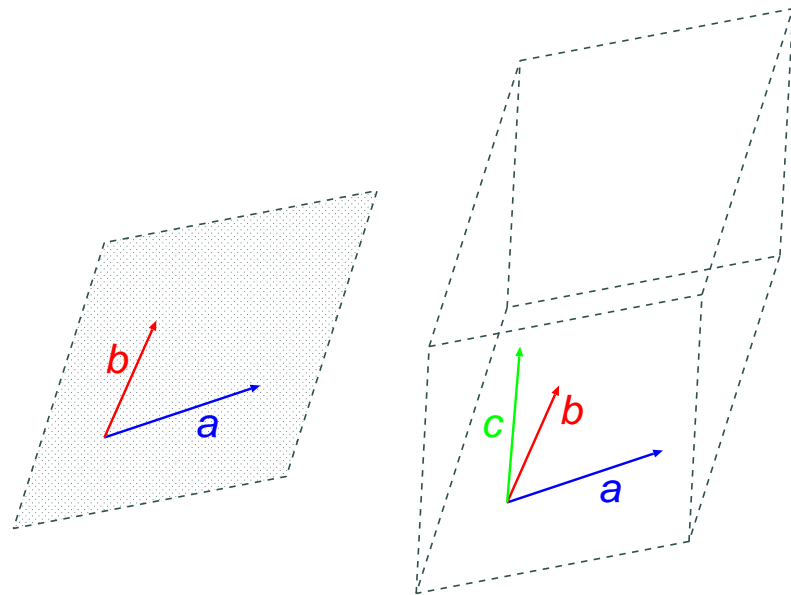
「 a_1, a_2, \dots, a_n によって**生成される** (張られる) 部分空間」という。

次元

次元 $\dim W = r$

部分空間 W の中に r 個の一次独立なベクトルが存在し、しかも $(r + 1)$ 個以上の一次独立なベクトルが存在しないとき、 W は r 次元であるといい、 $\dim W = r$ とか W^r であらわす。

- V^n には n 個の一次独立なベクトルが存在するから、 V^n の次元は n .
- $\{0\}$ の次元は 0 .



基底

部分空間 W ($\dim(W) = r$) の**基底**: 次の条件を同時に満たす (順番のついた) ベクトルの列 $\langle a_1, a_2, \dots, a_r \rangle$

- W の任意のベクトル x ($x \in W$) は a_1, \dots, a_r で生成される.

$$x = c_1 a_1 + c_2 a_2 + \dots + c_r a_r$$

- x が決まれば, 上式の c_1, \dots, c_r は一意に決まる ($\{a_1, a_2, \dots, a_r\}$ は一次独立).

$\{a_1, \dots, a_p\}$ ($p < r$) が r 次元の部分空間 W に含まれる一次独立なベクトルならば, この $\{a_1, \dots, a_p\}$ の他に $r - p$ 個の適当なベクトルを付け加えて W の基底とすることができる.